

第4章 廃棄物の将来推計

第1節 一般廃棄物（ごみ）の将来推計（平成32年度）

（1）将来推計の方法

- 一般廃棄物（ごみ）の総排出量の将来推計は、これまでの動向が将来も続くものとし、将来推計人口に、ごみ排出原単位を乗じて算出しました。
- 将来推計人口は、「日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）」（国立社会保障・人口問題研究所）を用いました。

$$\boxed{\text{将来のごみ総排出量}} = \boxed{\text{ごみ排出原単位 (※1)}} \times \boxed{\text{将来推計人口 (※2)}}$$

※1 ごみ排出原単位

平成25年度の実績値：1人1日当たり848グラム

※2 将来推計人口

表4-1-1 将来推計人口（熊本県）

	平成25年度	平成32年度
人口（人）	1,826,076	1,724,546

○平成25年度：「一般廃棄物処理事業実態調査」（環境省）

○平成27年度：「日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）」（国立社会保障・人口問題研究所）

- また、将来における処理状況については、再生利用率は市町村へのアンケート調査で得られた再生利用率の今後の見込みを、最終処分については平成25年度実績の最終処分率で今後も推移すると仮定し、平成25年度実績を基準として推計しました。

（2）将来推計結果

- 平成32年度のごみ総排出量は、53万4千トンで、県内人口の減少により平成25年度に比べ約5.5%（約3万1千トン）減少すると見込まれます。

表4-1-2 熊本県内の一般廃棄物（ごみ）の処理状況の将来推計

（単位：千トン）

	平成25年度（実績値）	平成32年度（推計値）
ごみ総排出量	565	534
総資源化量	112	111
再生利用率	19.7%	20.7%
減量化量	398	369
減量化率	70.4%	69.1%
最終処分量	57	54
最終処分率	10.2%	10.2%

○平成25年度（実績値）の「減量化率」及び「最終処分率」は、「ごみ総排出量」に対する割合としている。一方、「再生利用率」は、国の算定方法に合わせ「ごみ総処理量＋集団回収量」（567,281トン、7ページ及び9ページ参照）に対する割合としている。このため、上記の「再生利用率」、「減量化率」及び「最終処分率」の合計は100%とはならない。

第2節 一般廃棄物（し尿）の将来推計（平成32年度）

（1）将来推計の方法

- し尿及び浄化槽汚泥の将来推計については、将来の計画収集人口及び浄化槽人口に、し尿及び浄化槽汚泥それぞれの排出原単位を乗じることにより予測を行いました。

$$\boxed{\text{将来のし尿量}} = \boxed{\text{し尿の排出原単位 (※3)}} \times \boxed{\text{計画収集人口の将来推計値 (※4)}}$$

※3 し尿の排出原単位

過去5年間（平成21～25年度）実績の平均値程度で今後も推移すると仮定。

※4 計画収集人口の将来推計値

過去5年間（平成21～25年度）実績を用いて計画収集人口の予測を行い推計。

$$\boxed{\text{将来の浄化槽汚泥量}} = \boxed{\text{浄化槽汚泥の排出原単位 (※5)}} \times \boxed{\text{浄化槽人口の将来推計値 (※6)}}$$

※5 浄化槽汚泥の排出原単位

過去5年間（平成21～25年度）実績の平均値程度で今後も推移すると仮定。

※6 浄化槽人口の将来推計値

浄化槽人口は、合併浄化槽人口、集落排水施設人口、コミュニティ・プラント人口及び単独浄化槽人口の合計。

合併浄化槽人口、集落排水施設人口及びコミュニティ・プラント人口の将来推計は、「くまもと生活排水処理構想2011（平成23年6月）」（熊本県）で示されている整備見通し（平成32年度末における集落排水施設等と合併浄化槽を合わせた汚水処理人口普及率17.9%）を用いて推計を行った。

また、単独浄化槽人口は、総人口から公共下水道人口、合併浄化槽人口等を差し引いた数値とした。

（2）将来推計結果

- 平成32年度のし尿の排出量は、96千キロリットルで、人口の減少や公共下水道の普及により、平成25年度に比べ38.5%減少すると予測されます。
- 平成32年度の浄化槽汚泥の排出量は、308千キロリットルで、し尿と同様の理由により、平成25年度に比べ12.7%減少すると予測されます。

表4-2-1 熊本県内のし尿及び浄化槽汚泥排出量の将来推計

（単位：千キロリットル）

	平成25年度（実績値）	平成32年度（推計値）
し尿	156	96
浄化槽汚泥	353	308

第3節 産業廃棄物の将来推計（平成32年度）

（1）将来推計の方法

- 産業廃棄物量の将来予測に当たっては、今後とも「大きな技術革新及び法律上の産業廃棄物の分類に変更がなく、現時点における産業廃棄物の状況等と業種ごとの活動量指標との関係は変わらない」と仮定し、業種別、種類別ごとに次の式により推計しました。

$$\boxed{\text{将来の産業廃棄物量}} = \boxed{\text{排出原単位 (※7)}} \times \boxed{\text{将来の活動量指標 (※8)}}$$

※7 排出原単位

「平成26年度熊本県産業廃棄物実態調査等業務報告書（平成27年2月）」（熊本県）（以下「実態調査」という。）に記載する平成25年度の実績値を用い次の式により算出しました。

$$\text{排出原単位} = \frac{\text{実態調査により集計した産業廃棄物量}}{\text{実態調査により集計した活動量指標}}$$

※8 将来の活動量指標

過去の活動量指標の動向に対して数種類の回帰式（直線、指数曲線、べき曲線、対数曲線、ロジスティック曲線、修正指数曲線）を当てはめる時系列解析により行い、適合度の高い回帰式を採用することとしました。

- また、将来における処理状況についても、産業廃棄物に対する中間処理、再生利用、最終処分等の処理体系が平成25年度のまま今後も変わらないものと仮定し、実態調査により得られた業種別、種類別の処理・処分状況（原単位）に、将来の活動量指標を乗じて算出しました。
- なお、前期計画では、①排出量が多いものの排出抑制が困難である動物のふん尿、②廃棄物分野からの施策が講じにくい火力発電所のばいじんを控除して目標値を設定しましたので、この2品目を控除した推計値も算出しました。

（2）将来推計結果

- 動物のふん尿及びばいじんを含む場合と控除した場合の予測は、種類別及び業種別の推計結果を踏まえ、次の①及び②のとおり推計しました。

① 動物のふん尿、ばいじんを含む場合

- 平成32年度の排出量は、7,083千トンで、平成25年度から0.4%減少すると予測されます。

表 4-3-1 熊本県内の産業廃棄物の処理状況の将来推計（動物のふん尿、ばいじんを含む場合）

（単位：千トン）

	平成25年度（実績値）	平成32年度（推計値）
排出量	7,114	7,083
再生利用量	3,708	3,670
再生利用率	52%	52%
減量化量	3,228	3,235
減量化率	45%	46%
最終処分量	178	177
最終処分率	3%	2%

② 動物のふん尿、ばいじんを控除した場合

- 平成32年度の排出量は、3,792千トンで、平成25年度に比べ0.4%減少すると予測されます。

表 4-3-2 熊本県内の産業廃棄物の処理状況の将来推計（動物のふん尿、ばいじんを控除した場合）

（単位：千トン）

	平成25年度（実績値）	平成32年度（推計値）
排出量	3,807	3,792
再生利用量	1,817	1,787
再生利用率	48%	47%
減量化量	1,881	1,897
減量化率	49%	50%
最終処分量	109	108
最終処分率	3%	3%